

〈調査報告〉

21世紀の青少年版わらべうた？

——ヒューマンビートボックスとボイスパーカッションについてのインタビュー調査——

西島千尋

要旨

近年、ドラムの音を声で真似ることを基本とするヒューマンビートボックスおよびボイスパーカッションが主に青壮年層を中心に広まっている。前者は、日本でも大会（Japan Beatbox Championship, 日本ビートボックス協会）が行われるようになり、都市でも主にクラブやバーで「バトル」が開催されるなど知名度を増しつつある文化である。特に、インターネットの動画サイトやクラブカルチャーと結びついて発展しているという点で新しい音楽文化であると言えよう。しかし、ビートボックスおよびボイスパーカッションについての研究はごく少なく、その実態——ビートボクサーたちの動機、何に惹かれるか、どのように活動しているか——は明らかではない。

そこで、ヒューマンビートボックスおよびボイスパーカッションに携わる青年たちにインタビュー調査を試みた。その結果、彼らは必ずしも「インターネット」や「クラブカルチャー」に惹かれてビートボックスを行うのではないということ、むしろ、その手法を教え合ったり、日常生活のなかでの「遊び」として行ったりといった草の根的な要素が強いことが明らかになった。

キーワード：ヒューマンビートボックス、ボイスパーカッション、わらべうた、ジェンダー

はじめに

日本の文化伝統を尊重すべきだという意見が国会および中央教育審議会で提言されるようになって久しい。そうした意見をもとに教育基本法（2006年）および学習指導要領（小学校2011年、中学校2012年）が改訂され、日本の文化伝統が教科内容として取り込まれている。特に音楽科では、中学校で和楽器の学習が義務化されるなどの大きな動きがあった¹。小学校でも鑑賞教材（第1学年及び第2学年）として「我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊

りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい楽曲²を取り扱うことが明記されている(傍点筆者)。また歌唱に関しても「歌唱教材については、共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを取り上げるようにすること³と記されている(傍点筆者)。こうした流れを受けて、幼児教育の分野でもわらべうたの導入が着目されている。

情報化や都市化、グローバル化によって文化伝統の継承が途絶えるという漠然とした危機感が唱えられる今日であるが、筆者もそうしたことを実感する場面がある。筆者の担当科目「音楽専門研究Ⅰ」(2年生、前期)は、小学校の教員を目指す学生が、音楽科の授業を行うために必要な音楽の基礎理論を学ぶためのものである。すべての学生がすべての共通教材を知っているとは限らないだろうとの予想から、共通教材を1学年分ずつ歌う時間を設けている。第1回目に小学校1年生の、第2回目に小学校2年生の共通教材を取り上げたのだが、「ひらいたひらいた なんの花がひらいた れんげの花がひらいた」の《ひらいたひらいた》(わらべうた)、「かくれんぼするもの、よっといで、もういいかい、まあだだよ」の《かくれんぼ》(文部省唱歌、林柳波作詞・下総皖一作曲)を、受講生22名のうち(子ども発達学部2年生21名・4年生1名)、20名が知らないと言う。

1981(昭和56)年生まれの筆者は、幼少時にそれらを遊びのなかで歌っていた記憶がある。人から人へ、口承というかたちで継承される遊びの形態は、現代的な環境のなかで減少しているのだろうかと思わざるを得なかった。だが、ふとしたきっかけで、口承を基本とする新たな遊びが生まれていることがわかった。それが「ヒューマンビートボックス」および「ボイスパーカッション」である。どちらもドラムの音を模倣してビートを刻むことを基本とする⁴、「リズム楽器などを非言語音による直接的模倣音によって表現した音楽」[河本2012:163]である。

筆者は、2013年度に卒業したゼミの学生の一人が卒業制作として取り組み始めたことから、ヒューマンビートボックスに興味を抱いた。当初の興味は、インターネット(特にYouTube)およびマイクロフォンといった現代的なメディアが不可欠であり、かつクラブカルチャーとも関連しながら発展している、新たな音楽文化としてであった。そこで、実際にヒューマンビートボックスに取り組んでいる学生6名(現3年生、現4年生、2013年度卒業生)にインタビューを試みた。しかし、そこから浮かんできたのは人から人へ、口承というかたちで伝えられるという、いわば古典的な伝承形態であった。そこで本報告では、ヒューマンビートボックスおよびボイスパーカッションの、口承文化の一形態としての側面に着目したい。

1. ヒューマンビートボックスとボイスパーカッション

1-1. ヒューマンビートボックスとボイスパーカッションに対する認知

ヒューマンビートボックスには明確な定義がない。ヒューマンビートボックスを学術的に扱う論文も河本洋一の「ヒューマンビートボックスの可能性についての一考察—ビートボックス—への

聞き取り調査とワークショップを通して」(2012, 『札幌国際大学紀要』43) のみである⁵。

1,500人以上が参加するという世界的な大会 BOXCON が開催され⁶, 日本でも 2010 年に創設された日本ヒューマンビートボックス協会が「Japan Beatbox Championship」という大会を主催している。同大会には, 2013 年大会には小学生チームも出場するなど, 参加者の幅も広がっているという。しかし, 日本ではまだその知名度は低い。

2013 年度に, 日本福祉大学 2013 年度卒業生の大森友季生が同大学子ども発達学部の学生 119 名 (18 歳～22 歳) を対象に行ったアンケート調査 (2013 年 11 月実施) では, 「ヒューマンビートボックスを知っていますか」という問いに「知っている」と答えた学生は 31% にとどまった。一方, 「ボイスパーカッションを知っていますか」という問いには, 90% の学生が「知っている」と答えている。

この両者は同じものと認識される場合も多いが, ボイスパーカッションという言い方は日本に限定されると言われている。その理由は, ボイスパーカッションが日本のテレビ番組に由来するということにあるようである。先のアンケート調査では, 「ボイスパーカッションをどこで知りましたか」という問いに, 85% がテレビ番組と答えている。そのテレビ番組とは, おそらくフジテレビ系列「力の限りゴーゴゴー!!」であり⁷, その一コーナー「ハモネブ」であると推測される。「ハモネブ」はハモるの「ハモ」と, 司会を担当したお笑い芸人トリオ, ネプチューンの「ネブ」が組み合わせされた名称であり, 番組自体の終了後も現在にいたるまで「ハモネブリーグ」として不定期に放送されている。

ハモネブリーグは, 複数によるアカペラと, 主にドラムの音を模倣してリズムを刻むボイスパーカッションで構成されるグループの対抗という形式で行われる。現在では, アカペラとボイスパーカッションの組合せが「ハモネブ」と呼ばれるほど同番組は青少年層に支持されている。インターネット検索サイト Wikipedia によれば, ボイスパーカッションは RAG FAIR という「ハモネブ (番組)」を通じて人気を博し, メジャーデビューを果たしたグループにより広まったという⁸。

1-2. ヒューマンビートボックスとボイスパーカッションの違い

混同して認識されることも多いボイスパーカッションとヒューマンビートボックスには共通点も多い。先にも述べたように両者とも, 基本はドラムの音であるとされており, それらを用いてビートを刻む。しかし, 前者がドラムの音を忠実に再現することを目指す一方, 後者はあらゆる楽器 (トランペットなど), 鳥や風の音なども模倣する。「ハミングビート」と呼ばれる, 「鼻腔からハミングの音を出し, 同時に口からはビートを刻む別の音を出す奏法」もある [河本 2012: 162]。河本は「ヒューマンビートボックスとは, 狭義的には「リズム楽器などを非言語音による直接的模倣音によって表現した音楽」, 広義的には「口腔・鼻腔・唇・舌・歯を使って発音される様々な音を使って表現される音楽を意味する」と述べている [河本 2012: 163]。

もっとも顕著な違いは, ボイスパーカッションがアカペラと共に演奏することを前提としてい

る一方で、ヒューマンビートボックスは基本的に独立した演奏であり、歌に付随するものではないという点であろう⁹。先に述べたテレビ番組の「ハモネプリーグ」にも、出演者はグループ単位で出場する。一方、ヒューマンビートボックスの基本はビートボクサー同士の「ソロバトル」である。ビートボクサーたちの作るソロが「楽曲」と呼ばれていることから¹⁰、ヒューマンビートボックスが単独で成り立つものであることがわかる。

また、「ハモネプ」はフジテレビのホームページにも「青春アカペラ甲子園」と謳われており、大学のサークルや同じ高校の同級生がグループを作って出場するという形態が基本となる¹¹。高校生の場合は制服姿で出場するグループも少なくなく、番組内での紹介VTRにおいても「青春」「甲子園」といった言葉に似つかわしい、学生ならではの姿が描かれる。

一方、ヒューマンビートボックスは Wikipedia によると¹²、ブラックミュージックをルーツとしており、1980年代に現在の原形が生じたという。河本も「ヒューマンビートボックスとは、DJ (Disk Jockey) が使用するビートボックスというサンプリングマシン……の音を人間の声で模倣したことが由来とする捉え方が一般的」と述べているように〔河本 2012: 155〕、クラブカルチャーとも縁が深い。東京や名古屋などの都市で開催されるビートボックス・バトルも、主にクラブやバーの主催である。そうした場でのバトルでは、キャップにフード付パーカー、サイズの大きいパンツに作業用ブーツといった、いわゆるヒップホップ系ファッションを身につけるビートボクサーたちが競い合う。

1-3. インタビュー調査への予想

1-2で述べたシーンの違いから、筆者はヒューマンビートボックスに携わる青年層は、「青春」「甲子園」といったイメージのボイスパーカッションとは異なる、クラブカルチャーおよびヒップホップカルチャーの一環であることに惹かれているのだろうと思いついてきた。また、インターネットを介し、日本だけではなく「本場」アメリカのビートボクサーたちのパフォーマンスに触れられるという点でも、よりヒップホップに近い文化としての魅力があるのだろうとも考えていた。さらに言えば、歌のためにビートを刻むという役割を超えて、新たな音（鳥、風、極端に低い声、ハミングビートなど）を創り出すことの出来るクリエイティブな楽しさにも惹かれているのだろうと予想していた。

しかし、実際にインタビューを行ってみると、ボイスパーカッションもヒューマンビートボックスも、必ずしもこうしたカルチャーの一環として捉えられているわけではないということが明らかになった。特に、個々人の日常のレベルでは、そうした文化的な違いが意識されない場合もあるのである。

2. インタビュー調査

筆者がインタビューを試みたのは以下の6名であり（いずれも日本福祉大学の在校生と卒業生

【表 1：インタビュー協力者基本情報一覧】

	インタビュー日	基本情報
A 2013 年度卒業生	2013 年 4 月－12 月 (授業開講期間の不定期の金曜日)	<ul style="list-style-type: none"> ・ボイスパーカッションの経験はあったが、テレビ番組でヒューマンビートボックスを知って以降、特に在学時 4 年生の 1 年間は精力的にヒューマンビートボックスに取り組む。 ・卒業後も活動を続けており、名古屋のバーなどで開催されているバトルにも出場。
B 現在 4 年生	2014 年 4 月 17 日	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生以来「ハモネプ」の大ファンであり、ボイスパーカッションをやりたいと思っていた。しかしスポーツ系の部活動が忙しく機会のないまま大学に入学。 ・3 年生時に偶然、A と知り合い、A の在学中は A からヒューマンビートボックスを教わるようになる。
C 現在 4 年生	2014 年 4 月 24 日	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生の頃から「ハモネプ」を通してボイスパーカッションを知っていたが、高校入学後に同じサークルに所属する友人からボイスパーカッションを教わるようになった。 ・現在、B とともにヒューマンビートボックスに取り組む。
D 現在 3 年生	2014 年 4 月 24 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ボイスパーカッションという言葉はなんとなく知っていたものの、まったく興味を持ったことがなかった。 ・大学 2 年生時にヒューマンビートボックスの映像に惹かれ、実践するようになった。上達すれば将来的にはバトルに出場することにも興味がある。
E 現在 3 年生	2014 年 4 月 29 日	<ul style="list-style-type: none"> ・母親の影響でアカペラには親しんでいたものの興味もなく、ボイスパーカッションも知らなかった。中学・高校も運動部に入っていたが、怪我によりスポーツを続けることが難しくなる。 ・大学入学時に、アカペラサークルに出会い、ボイスパーカッションに魅せられる。最初はアカペラ担当だったが、志願の後、ボイスパーカッションを担当。ヒューマンビートボックスに興味があり、やってみたいと思っている。
F 現在 3 年生	2014 年 5 月 27 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ボイスパーカッションに興味はなかったが、アカペラサークルに入ったことをきっかけに、教わるようになった。それ以来、暇なときに取り組んでいる。

かつ男子学生、それぞれ仮名 A・B・C・D・E・F を用いる)、インタビューを行った場所は日本福祉大学の 1541 教室である。

以下に、インタビューから得られた情報を、「インターネット」「クリエイティビティ」「モチベーション」「手軽さ」「口承」の 5 つを鍵とし整理する。

2-1. インターネットと密接な音楽文化

6 名のうち、ヒューマンビートボックスの経験のある A・B・C・D の 4 名にとって、ヒューマンビートボックスが「インターネット（特に YouTube）を媒介した新たな文化」という予想は妥当なものであった。たとえば、B が中学生の頃から興味があったものの、大学 3 年生時に急にのめり込み始めたのはパソコンの購入がきっかけだったという。

筆者「中学生の頃からやりたいと思っていたのに、(大学)3年生になって突然、やるようになったのは何かきっかけがあったの?何かが変わったの?」

B 「変わったってゆうか、単純な話なんですけどパソコンを買ったんです。……就活で必要になって、(パソコンを)買って、インターネットつないで、YouTube 観るじゃないですか。そしたら(ヒューマンビートボックスなどをYouTube で)観ます」

筆者「スマートフォンでも観られるんじゃない?」

B 「携帯とかでも夜中だったら回線がよくなって、夜中也観るときはあります。でも日中は(速度が)遅くて、パソコンじゃないと難しくて」

YouTube には、ビートボクサーの「バトル」だけではなく、どのように音をつくるのかといったハウツー用の動画も多い。こうしてBは就職活動が本格化する以前は、1日に6~7時間、YouTube の動画を観ていたという。Bほどではないにしても、5名全員にYouTube の動画を観て学ぶという経験は共通していた。たとえばDは「時間があるときは動画とか観て、チビチビやってます。2年生のときとかは、夜、週2~3で観てやりました」と話している。こうした要素は、情報化社会ならではの音楽文化の一端とも言える。

2-2. クリエイティブな楽しさ

ヒューマンビートボックスが新しい文化であるからこそ、創意工夫を凝らし、独自のパフォーマンスを行う楽しさがあるのではないかという予想に関しては個人差があった。たとえば、A、C、Dはヒューマンビートボックスのそうした点に惹かれている。CとDは以下のように話した。

(Cの場合)

筆者「(双方をはっきりと区別せずに取り組んでいるというCに)ビートボックスとボイスパーカッション、どっちの方がやりたい?」

C 「ビートボックスですね。歌にあわせるより、リズムでやりたいって思いますね」

筆者「それはどうしてなのかな?」

C 「その方がおもしろいからですかね。いろんな音が出せるし、自分なりにリズムでアレンジができるし」

(Dの場合)

筆者「どうしてビートボックスをやってみたいと思ったの?」

D 「ハモネプは(Dが音楽の)素人だからか、あんまり(ボイスパーカッションの)音がよくわかんない、聞き取れないんですけど、ビートボックスは楽器とかの音を、いろいろな音を出すっていうのがすげーなーって思って。こんな音出せるんだ、自分の口で、自分も

やりたいなって」

また、ヒューマンビートボックスの経験はないが興味はあるというEは、もともとアカペラサークルの活動の中で、独自性にこだわっている。特に「フィルイン」と呼ばれる、メロディの繋ぎ目（1～2小節程度）の多様さは誰にも負けないという自負があり、フィルインやソロのときにヒューマンビートボックスの創造的な要素を取り込んでみたいと話していた。

E 「自分にしか出せないっていうのもありますし、人のを聞いて、さらにアレンジする楽しさがある。いつまでも成長していける。コーラスとかだと、音を聞いてできるようになるだけです。ボイパ（筆者注：ボイスパーカッションの略称）は音の組み合わせとか、リズム変えたり、そういうのが魅力ある」

一方、Bは（後に述べるが）本来やりたいのは「ハモネプ」であるということもあり、ヒューマンビートボックスのそうした要素には消極的である。

筆者「新しい音というか、新しい技をつくることに興味はない？」

B 「ないです。ヒューマンビートボックスをやりたいていうよりは、自分がベースをやって、皆に歌って欲しい」

また、アカペラサークルに所属するEは、約40名程度のメンバーのうち、ボイスパーカッションが4名と少数であることについて、フィルインやソロなどを考えるのが面倒くさいと感じるメンバーも少なくないからだとして述べていた（そのように感じるメンバーは、楽譜通りに歌うヴォーカルやコーラスを担当する）。

ヒューマンビートボックスの「厳格な決まり事が少な」く「独自の方法で発音し、音楽を構築」できるという〔河本2012：163〕、新たな音楽文化ならではの要素に惹かれる者がいる一方で、そうではない者もいるということである。

2-3. ヒューマンビートボックスへのモチベーション

またヒューマンビートボックスに対するモチベーションにもかなりの個人差があった。想定していた「文化的シーンや服装なども含めたクラブカルチャーの一端としてヒューマンビートボックスに惹かれる青年像」は筆者の先入観であった。彼らの語った、ヒューマンビートボックスに対するモチベーションは、「ガチ」「趣味」「一時的」の3段階にわけられる（「ガチ」は最近の若者が好んで用いる「真剣に」といった意味合いの形容詞である）。

まず、「ガチ」というのは普通の練習からマイクや音響にこだわり、バトルなどに出場して高いレベルを目指すことである。「ガチじゃないけどやってる友達がいる」と話したCに、「ガチっ

てどんな風にやるとガチなの？」と尋ねると、「自分のなかでは、家でも本当にしっかり練習してYouTubeとか見ながら、けっこうマイクで練習するとガチになっちゃうと思う」という答えが返ってきた。

「(ガチなヒューマンビートボックスは) どうかで無理だと思ってる。見るだけで十分かな」と考えているというCは、ヒューマンビートボックスは「趣味」でやりたいのだと話した。

筆者「ヒューマンビートボックスを続けることの目標は何？」

C 「趣味程度でやればいかなと思ってます。生涯を通じて暇なときに趣味で」

筆者「卒業してもやりたいと思う？」

C 「まあ別に、趣味程度であれば。暇なときに口ずさむ、くらいな」

バトルへの出場にも興味はあるというDも同様である。

D 「自分は趣味もってないんで、ビートボックスは趣味になりつつあるんで」

筆者「サークルは趣味じゃないの？」

D 「サークルは半ば強制ってゆうか義務みたいな。サークルを趣味って考えてなかった」

筆者「じゃあサークルとは何が違うんだろう？」

D 「一人で自由にやれるみたいな。自分の趣味は」

「ガチ」で取り組むことは難しいとしても、「趣味」であれば続けたいと考えているCとDに対し、Bはヒューマンビートボックスにはどちらかと言うと負のイメージすら抱いているようである。

B 「ヒューマンビートボックスって自分のなかでは暗いイメージがあるんですよ。男の人の声っていうのもあるし、やってる場所も暗い(筆者注:バトルなどはクラブなどのステージが多い)。本気の大会は暗い。すごいけど、明るくない。暗いイメージしかない」

Bは「本気の大会は暗い」と述べているが、彼はクラブカルチャーもさることながら、バトルという形式に馴染めないのかも知れない。Bは次のようにも話していた。

B 「(ヒューマンビートボックスは) すごいんですけど、もうちょっと何か無理ですね明るくするのは。どっちかって言ったらチャライ系の人がお客さんにも多い、ヒップホップ好きが多いし、クラブにむっちゃ行っているみたいな」

筆者「じゃあヒューマンビートボックスを続けたいとは思わない？」

B 「はい。ボイパがうまくなるならやるって感じですよ」

こうした B の発言を聞くと、クラブカルチャーと一体になっているからこそ、ヒューマンビートボックスに馴染めない場合もあるということがわかる。B にとっては、ヒューマンビートボックスはあくまでも一時的なものであり、ボイスパーカッションをスキルアップさせるためのものであった。

2-4. 手軽なものとしてのヒューマンビートボックス

「ガチ」な場合、特にバトルなどに出場するような場合にはマイクの使用が必須となる。また、マイクでやると気持ちがいい（お風呂で鼻歌をうたうように）ということも共通していた。たとえば B と C は次のように話していた。

(B の場合)

B 「マイク使えとプッっていう音でも、ドンッて鳴るんですよ。マイクあるのとないのとでは全然違います。」

(C の場合)

C 「マイク使うと違うんですね、やっぱり大きく音が出たりして、いい感じに聞こえたりするんで」

しかし、マイクはあくまでもあった方がよいというツールであり、なければ実践が不可能だというわけではない。「身体だけでできるという軽快さ」[河本 2012: 163] はヒューマンビートボックスの大きな魅力であろう。特に音楽経験のない者にとって、楽器の購入やレッスン受講などの必要性がないということによる敷居の低さがある。

筆者「これまでに何か音楽経験はある？」

D 「何もやったことない。本当に。ベースを高校 3 年生のときやろうと思ったんですけど、何か違うなど。たぶん、直感的に続かないと思った」

筆者「でもビートボックスは面白いと思えた？」

D 「そうですね！いろんな音と、正直、金銭面の部分とか、ビートボックスは気軽に練習できます。一回動画みて、反復練習して、場所も問わず出来る」

また【表 1】にもあるように、B が本当にやりたいのは「ハモネブ」なのだと言う。アカペラサークルに所属していない、歌ってくれるメンバーがいない、などの理由から今現在は C とヒューマンビートボックスをとりあえずやっているという状況である。興味深いのは、B が本当にやりたいのはドラムだということであった。

筆者「音楽の経験、たとえばピアノ習ったり、ブラスやったり、そういう経験はある？」

B 「楽器をやったことはないけど、ずっとドラムをやりたいと思ってたんですよ。保育園で英語でミュージカルとか、楽器を使って演奏をしたり。そのなかに、鍵盤ハーモニカ、鉄琴、木琴、ドラム、トライアングル、タンバリン、大太鼓、小太鼓があって、ドラムも子どもがやっていて、今思えばむちゃくちゃ単調だったんですけど、でも格好いいって思っていました」

筆者「ドラムに立候補しなかったの？先生が楽器を決めるの？」

B 「自分で楽器を決められたんですけど、ドラムは一人めっちゃくちゃ元気な子がいて、まあいっかって、譲ろうって思ったのを覚えてるんです。結局自分は、鍵盤ハーモニカとタンバリン、トライアングルしかやらなかった」

筆者「じゃあ保育園のあとは？ドラムをやる機会はなかった？」

B 「小学校に入ったら毎日サッカーやってて、楽器を触る暇がなかった。……ずっとドラムをやりたい気持ちがあって、今でもあります」

筆者「どうしてそんなにドラムに惹かれるんだろう？」

B 「ベースじゃないですかね。ベースの重低音が格好よくて、もともと低音が好きで、皆だったら普通に聞いているんですけど、自分はバスの音を聞いているんですよ」

筆者「そんなにドラムが好きで、じゃあどうして今は（ドラムではなく）ボイスパーカッションなの？」

B 「今からでもドラム練習できるんなら、やりたい。でも、やれる環境がないから」

確かに、ドラムセットを購入することは経済的にも負担になるうえに、通常の住まいでは音を出すことも難しい。また（他の音楽や楽器も実際はそうではあるが）何歳になっても始められるという気軽さは、音楽演奏経験のない青年層には特に重要な点であると推測される。

2-5. 口承としてのヒューマンビートボックスとボイスパーカッション

ここで述べる事柄が、インタビューの結果もっとも驚かされた事柄である。当初は、クラブカルチャー、ヒップホップカルチャーに通じることが魅力の一端だと思い込んでいたため、皆が「バトル」を目指すのだと思っていたがそうではなかった。

筆者「バトルに出てみたい？」

D 「考えてもないですね。出られるほどのレベルじゃないんで」

筆者「レベルの問題なんだ？」

D 「それもありますし、ただ単に人の前で披露するのが恥ずかしいってゆうのがあります」

アメリカの民族音楽学者トマス・トゥリノが述べる「上演型 presentational」¹³の「バトル」

に躊躇する者もいて当然であるし [Turino2008], すでに述べたように B のようにクラブ文化そのものに馴染めない者もいる。彼らに共通していたのは日常生活で、ヒューマンビートボックスやボイスパーカッションの文化的な要素（クラブカルチャー、ヒップホップカルチャー、「青春」）とは無関係に、ただ「打つ」「プシュプシュ言う」ことを楽しんでいるということであった。

C 「暇なときは口ずさんでるみたい。プシュプシュゆってるくらいですけど。今も暇なとき、勉強しながら口ずさんでますもん」

筆者「(サークル以外で) 家でも練習する？」

E 「暇さえあればやってる。家でもやりますし、通学とか、家から駅に向かうときとか、周りに人がいないか確認して、ぶつぶつ言ってる。講義の空きコマにピアノ棟で練習したりもします」

筆者「そんなにずっと？」

E 「はい、気分があがっているときとか。バイトの暇なとき、飲食店で厨房やってるんで、料理つくってるときも楽しいときいっぱいあるんで、そんなときブツブツ打ったり。音楽が流れているときとか、もう無意識で、それに合わせて口ずさんでる自分がある」

また、F の同級生が、F がボイスパーカッションをしながら歩いているところをキャンパス内で見かけたと話していたが、筆者自身も F が授業中に「打って」いるところを目撃した。ふとしたときに口ずさむということは、鼻歌に近い感覚なのだろう。しかし、鼻歌と異なるのは、ヒューマンビートボックスやボイスパーカッションが、複数人の「遊び」の場を生み出すということである。「ガチ」や「趣味」ではなくても、一人で口ずさんでいる友人の周囲に人が集まり、教えたり、教わったりという場ができるらしい。

A のように、ほとんどを YouTube で学んだというケースもあるが、それ以外の B, C, D, E, F は誰かに教わっている。F はアカペラ・サークルで「ベース」と呼ばれるパート（歌詞ではなく du や dm, lu などハミングに近い音でリズムを刻む）を担当しているが、興味を持ってサークルの後輩にボイスパーカッションを教わったのだという。

筆者「何がきっかけでボイスパーカッションを始めたの？」

F 「アカペラってイメージがボイバなんです。たとえば、バイト先の人とかにアカペラやってるんですって言ったら、「じゃあボイバできるの」って言われることが多々あるんです。でもできないんで、「ベースなんです」と答えたら、関心を持ってもらえない。」

筆者「そうなんだ。それがボイスパーカッションを始めたきっかけ？」

F 「まあ、それで興味わいて。あと、皆がやってるのを見て、楽しそうだなって思って。後輩に、どうやんのって聞いて、3つ（バズドラム、ハイハット、シンバル）だけ教えても

らって、簡単なやつだけだったんですぐできて、それ以来、暇があったらベースやるんですけど、気分がのったらポイバをやっています」

また、Cはボイスパーカッションを知るきっかけが友人であり、教わったのは後輩であったと話していた。

筆者「ボイスパーカッションを知ったのはいつ？」

C 「高校のときから知ってたんですよ。友達が好きだったんです。高1のときから知ってて」

筆者「そのお友達はどうして知ってたのかな？」

C 「どうして知ってたかはわかんないですけど、そんなガチな感じじゃないんですけど、その友達は中学校のときからやってて、サッカー部だったんですけど、そいつが（ボイスパーカッションを）やりながら片付けたりしてて、それで知りました」

筆者「じゃあそのお友達に教えてもらったの？」

C 「特に本当にじゃなくて、テキトーな感じで。あと、高3のときに（サッカー部に）1年生の後輩がいたんですけど、そいつがめちゃくちゃ（ヒューマンビートボックスが）上手かったんですよ。そいつからスクラッチとか教えてもらいましたね。そいつキーパーだったんですけど、ボールが（ゴールに）来ないときはビートボックスしてたみたいです」

こうして友人に教えてもらって始めると、今度は教える立場にもなる。

筆者「誰かに教えてほしいって言われたことある？」

B 「あります。それどうやってやっとなの？って聞かれることもあって、スクラッチとか誰でもできるから、けっこう何人くらいかな？十何人に教えて皆でやったこともあります」

アカペラサークルでボイスパーカッションを担当するBも、ボイスパーカッションの担当でないにも関わらず興味を持つメンバーらに請われ、常時5、6名にボイスパーカッションを教えているのだという。

また、友人同士でカラオケに行ったときに、歌うことをいったん中止し、ヒューマンビートボックスやボイスパーカッションを披露し合うこともあるという。

(Bの場合)

B 「本当にまったく出来ない人って、カラオケでバスとスネアとハイハットをやっただけで、「スゴイ」って言ってくれます」

筆者「カラオケでもやるの？」

B 「たまに、K（ビートボックスを知っている友人）と行くときは絶対やります」

(C の場合)

筆者「カラオケでもするの？」

C 「ふざけてですよ」

筆者「ふざけて？」

C 「ちょっとやるっていうときもありますけど、10分とか20分とか（ヒューマンビートボックスを）やって、また歌うか、とか。」

(E の場合)

筆者「ヒューマンビートボックス、やってみたい？」

E 「やってみたいです！」

筆者「どうしてやってみたいのかな？」

E 「……カラオケでやってみて、すごいつて言われてみたい」

筆者「ボイスパーカッションもカラオケでやることある？」

E 「おまえ、アカベラやってんでしょって言われて、じゃあやるわみたいな感じで打つって感じですね」

筆者「そうなんだ、そういうときの周りの反応は？」

E 「すごいつて言われます」

(F の場合)

筆者「カラオケでもボイスパーカッションをやるときがある？」

F 「自分はやらないけど、やってくれる人もいます」

筆者「どんなときに？」

F 「時間が空いたときとかに「やってよ」って言って」

こうした彼らの発言は、「バトル」およびバトルを想定した実践というよりは、教えられたり、教えたり、カラオケで披露したりといった、どちらかと言えば「遊び」の実践を思い起こさせる。

(B の場合)

筆者「誰かに教えてほしいって言われたことある？」

B 「遊びで教えるときはたまにある」(傍点筆者)

(Cの場合)

筆者「自分も教えたことある？」

C 「遊びですよ、サークルの同じ学年で話し合いをしてみるとときに、ビートボックスやってよって言われて、どうやってやるのみたいな感じで教えたことがありますよ」(傍点筆者)

筆者「お友達と一緒に練習する方が良いのかな？」

C 「そういう場を設けられた方が……練習できる。そっちの方が一人とかでやるよりは、皆で楽しみながらできます」

(Fの場合)

筆者「どんなときに(ボイスパーカッションを)やってるの？」

F 「主に歩いているとき」

筆者「歩きながらするんだ」

F 「よく、それで遊んでいます。自分ひとりでやってるだけです」(傍点筆者)

BとCは「遊びで」という表現を用いているが、彼らは教えたり教えられたりする場を通じて、まさに「遊んで」いるのだろう。今回のインタビューを通して浮かび上がったのは、勉強しながら、アルバイトをしながら、ゴールキーパーがボールを待つ間に、カラオケの歌の合間にと、日常生活のなかで、一人で、または複数の友だちと、ヒューマンビートボックス、ボイスパーカッションを楽しむ青年たちの姿であった。

おわりに一現代の青少年版わらべうた？

繰り返すが、筆者はヒューマンビートボックスの実践者にインタビュー調査をすることで、「青春」「甲子園」といったイメージの音楽文化としてのボイスパーカッションを卒業し、海外と通じるより大人の音楽文化としてのクラブカルチャーに身を投じる若者像が浮かび上がると考えていた。しかし全員が、バトルなども含めた「ガチ」な活動を行ったり目指したりするわけではない。ボイスパーカッションのスキルアップのためというように明確な区別を必要としない者もいる。さらに、一人や複数で「遊び」として行われているということがこのたびの調査で得られた何よりの知見であった。

ここで思い起こされるのがわらべうたの機能である。わらべうたは、子どもが一人や複数で遊ぶための歌という要素をもつ。わらべうたの分類は多様であるが、たとえば詩人でもある川崎洋は、著書『日本の遊び歌』に「おまじない(呪文いろいろ)」という分類を設け、「ちちんぷいぷいいたいいたいとんでけ」や「どれにしようかな天神様のいうとおりに」を含めている〔川崎1994:98-110〕。また「言葉遊び歌」には「唱え文句いろいろ、早口言葉、数え歌、回文、絵描

き歌」があるとしている。岩井正浩も、わらべうたに「となえうた」という分類を設け、「動物、天体気象、早口言葉、数えうた、しり取りうた、悪口・からかうた、まじない・約束うた、替えうた」があるとしている [岩井 1987]。

「うた」というと、はっきりとしたメロディがあるものを思い浮かべやすいが、少なくとも、子どもたちはそうしたものだけではなく、ただ言葉を発すること、ただとなえることでも遊ぶ。そうした機能に着目すれば、唱え文句や早口言葉もわらべうたと捉えることができる。岩井は「となえうたは、“となえること”自体が目的となってい」と述べていた [岩井 1987: 15]。

こうした点も踏まえると、ヒューマンビートボックスやボイスパーカッションは、現代の青少年版のわらべうたとも言えるのではないだろうか。《ひらいたひらいた》や《かくれんぼ》で遊んだ経験がなく、それらの歌を知らないからと言って、口承という形態による「遊び」が途絶えたわけではないのである。また、「わらべ」だけではなく、高校生や大学生らの間にも、そうした「遊び」が存在していると言える。

ジェンダーの観点から

さいごに付け加えておきたいのは、ジェンダーという観点からのヒューマンビートボックスとボイスパーカッションである。筆者がインタビューを行った6名は全員が男子学生であった。これは筆者の直接知るヒューマンビートボックスやボイスパーカッションの経験がある女子学生がいなかったことにもよるが、どちらも圧倒的に男性および男子学生が多いという現実がある。

なぜ女子学生のヒューマンビートボックスやボイスパーカッションの人口が少ないと思うか、Bに尋ねてみた。

筆者「女の子に教えてって言われたことある？」

B 「女の子は「スゴイ」で終わり。恥ずかしいんじゃないですか、女の子は、おしゃべりの一環としてっていうことはあるけど、本当に教えてって言うのはないですね」

筆者「どうして男性が多いんだろう？」

B 「先生は？やりたいですか？」

筆者「えっ！私？うーん……面白くて新しい文化だっていう興味はあるけど、やってみたいかどうかって聞かれたらどうかな…」

B 「それと同じですよ。細かいことを言うと、けっこう唾飛ばんですよ。女の子で唾バンバン飛ばしたい子なんていないですよ！女の子がやるものでもないかも知れないですよ。唾飛んどるところか見られたくない、男だって見られたくないのに」

筆者「そっか。じゃあ女の子に教えてって言われたら？」

B 「教えます、全然。でも恥ずかしさって絶対あると思う」

Bは「恥ずかしさ」を例にあげたが、特定の楽器に付随するジェンダー意識とも関連があるの

ではないだろうか。武知優子は、楽器に対するジェンダー・ステレオタイプが存在し、かつ自分の性別に適合する楽器を好む傾向が強いということを報告している [武知 2013]。ちなみに、武知が 2005 年に行った小学生を対象とする調査では、「ドラム (たいこ)」を男子向きと捉える小学生が 90.5%であったという。また、「ドラム (たいこ)」は、男子の弾きたい楽器 2 位に選ばれている (1 位はギター)。

ドラムの音を模倣することが基本となるヒューマンビートボックスおよびボイスパーカッションを、女子学生がやってみたいと思わないということとの間には、このようなジェンダー・ステレオタイプが存在すると想像される。こうしたジェンダーの観点も含め、今後はより広範な調査を続け、現代の口承文化および口承による「遊び」に着目したい。

謝辞

インタビューに応じてくださった 6 名に感謝申し上げます。

注

- 1 「和楽器については、3 学年間を通じて 1 種類以上の楽器を用いること」文部科学省ホームページより「平成 10 年度改定中学校学習指導要領音楽」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320120.htm (2014 年 5 月 28 日アクセス)
- 2 文部科学省ホームページより「小学校学習指導要領」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2011/03/30/1304417_002.pdf (2014 年 5 月 28 日アクセス)
- 3 「共通教材」は各学年で必ず歌わなければならない楽曲。各学年 4 曲 (引用は注 2 に同じ)。
- 4 バスドラム、スネアドラム、ハイハット (オープンとクローズ)、シンバル、リムショット (スネアドラムのふちをスティックでたたく) が基本とされる。日本ヒューマンビートボックス協会の創設に携わった TATSUYA と AIBO も、「ヒューマンビートボックスの初心者には、ドラムセットのバスドラム、ハイハットシンバル、スネアドラムの直接的模倣御をまず習得し、この三つの音を組み合わせたリズムパターンの演奏をすることから始めるとよいとしている」という [河本 2012: 158]。
- 5 論文情報ナビゲータ CiNii (国立情報学研究所) 検索結果 (2014 年 5 月 28 日アクセス)。
- 6 BOXCON ホームページより。 <http://www.beatboxconvention.com/about.php> (2014 年 5 月 28 日アクセス)。
- 7 放送は 2001 年 5 月 - 2002 年 9 月。
- 8 ウィキペディア「ボイスパーカッション」(2014 年 5 月 28 日アクセス) <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9C%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%91%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%83%83%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3>
- 9 これはソロ演奏を前提とするという意味ではない。Japan Beatbox Championship では複数のビートボクサーがアンサンブルを行うチーム・コンテストが行われている。また、番組「ハモネプリーグ」内でも、2001 年からはボイスパーカッションがソロとして競われる「ボイパリーグ」が設けられている。
- 10 日本ヒューマンビートボックス協会 HP, <http://www.japanbeatbox.com/release.html> (2014 年 5 月 28 日アクセス)。
- 11 応募に必要な必須項目に学校名があるため、原則的に学生でなければ出場できないことになる。番組ホームページ <http://www.fujitv.co.jp/nepleague/hamonep/boshu.html> より (2014 年 5 月 28 日ア

- クセス).
- 12 Vocal Percasion として Beatboxing の項目に記述 <http://en.wikipedia.org/wiki/Beatboxing> (2014 年 5 月 28 日アクセス).
 - 13 パフォーマーと観客の明確な区別をもたない「参与型 participatory」に対して用いられる。また、上演型はパフォーマンスのために設けられたステージ上でパフォーマンスを行うのに対し、参与型は自宅や地域の祭礼が主なシーンとなる。

引用文献

- 岩井正浩, 1987, 『わらべうた—その伝承と創造』音楽之友社
- 川崎洋, 1994, 『日本の遊び歌』新潮社
- 河本洋一, 2012, 「ヒューマンビートボックスの可能性についての一考察—ビートボクサーへの聞き取り調査とワークショップを通して」『札幌国際大学紀要』43, pp.155-165
- 武知優子, 2013, 「小学校における音楽教育と小学生の音楽活動にみるジェンダー—先行研究とインタビュー事例からの問題提起」『音楽教育実践ジャーナル』11 (1), pp. 98-105
- Turino, Thomas. 2008. *Music as Social Life: The Politics of Participation*, University of Chicago Press